

広報文 コマ放流実験

皆様方におかれましては 既に新聞等の記事により、ご存知の事と思いますが、私共グループ・ニライカナイでは現在、日本海および太平洋の表層海流の調査を目的といたしまして、木製コマの放流実験を実施いたしております。

与那国島西方沖8kmの黒潮流域を起点として、2005年6月から隔月ごとに1000個ずつ、合計10000個のコマを放流して、季節や、気象の変化によって表層海流は、どのように変動するのかを 継続的に観測するという、地球環境を知る上にも、考古学的検証を得る為にも 極めて重要なデータをとる、実験です。

この度「グループ・ニライカナイ」が、このような、自然科学の領域とも思える実験を始めるきっかけとなったのは、日付変更線近くで、船が嵐に遭遇して傾き、「積荷のオモチヤのアヒル」が流失した。と言う事故がありました。期せずして放流されてしまったアヒルの漂流動態が、海流のデータを必要とする海洋学者や海難救助、地球環境に取り組む研究者達にとって 極めて貴重なデータを提供する結果になりました。

時をほぼ同じくして我々研究グループの仲間が ある太平洋学会に参加した折、米国の海洋学者カーティス・エベスマイヤー博士から、 実験的に黒潮を起点として漂流物を流してみてくれないだろうか。と言う打診を受けました。

この提案は 考古学の検証を得る為にも実は極めて重要な提案だったので。

太古の人々が 木の葉のような舟や筏で、海を渡った。という 言い伝え、は数限りなくあります。日本人(縄文人)は黒潮に乗ってやってきたと言われております。また、モンゴロイドは、あの広大な南太平洋を拡散して、ついにはハワイ諸島まで 辿り着きました。

日本の黒潮に関する最初の記録としては 「平家物語」に平 頼安 が流された鬼界島から、悲願をこめて、流した卒塔婆が巖島神社に流れ着いた。と言う記録があります。

また宮崎県から出土した縄文土器が なんと南米のヴァルデビアで発見された土器の文様と そっくりであった。と言う事がありました。早速私達は、ヴァルデヴィア考古学の碩学、米国スミソニアン研究所のベティー・メガーズ博士に情報を提供しました。博士よりただちに 調査員として、飯塚文枝氏が派遣され、グループ・ニライ カナイと共同調査を行いました。 このような文様は、果たして関連しているのでしょうか。

南太平洋バヌアツのエファテ島で発見された土器の胎土が、青森県の三内丸山遺跡から出土した土器と同じものであった。ということもありました。

コレも遙か縄文の昔の事、激流黒潮を乗り切って、恩馳島(神津島沖)から本州まで巨大な黒曜石を 運んだ事実が残されています。はたして彼等はくり抜きの丸木舟で黒潮を走破したのでしょうか。 現代の考古学でも解明しきれない事実が 数々残されています。このような偉業が成し遂げられたとしたら、キーポイントは、「海流と風」としか 考えられません。

スミソニアン研究所の B・メガーズ博士からは「この度のコマ放流実験は、考古学的にも素晴らしい。多大な期待を寄せている」言う 激励をいただきました。私共グループニライカナイ研究員一同、皆様のご期待にそえるようこの実験を完遂したいと、考えております。

また一方では 私どもの企画を、報道やインターネットで知った、学校や水族館などから、子供達の体験学習として 実験コマに子供達の 名前や、夢、等を書かせて流す事は出来ないだろうか。という打診をいただきました。私達も子供達の自然に対する夢や、興味を育成する一助にもなるこのような、お申し出には、出来得る限り協力させていただくつもりでおります。最初は、与那国島の子供達が 夢や自分の名前、願い、を書いて放流し、その後、愛知県田辺市の福江小学校、東京都の新島小学校 などの子供達が流しております。子供達にとって何ヵ月後、何年後に どんな国の、どんな人が、拾得した情報をくれるのか。夢は限りなく広がる事でしょう。

最後に 私共グループ・ニライ カナイは学術研究を目的としております。営利、売名は一切目的としておりませんので、この点お含み置き賜りたく何卒宜しくお願い申し上げます。

グループ・ニライ カナイ